

# 大阪と東京の考現学

正高信男

まさたか のぶお / 1954年生まれ。大阪府出身。大阪大学大学院人間科学研究科修了。現在、京都大学霊長類研究所教授。専攻は比較行動学。主著に『いじめを許す心理』『育児と日本人』（岩波書店）『ケータイを持ったサル』『考えないヒト』『老いはこうしてつくられる』（中央公論新社）などがある。

愛知県に在住して、足かけ一五年になる。東京や大阪へ出かけるのは、出張のとき。その際、JR東海道本線や山手線、大阪環状線を利用する折には、必ず乗客をウォッチングするように心がけている。あるところから、ふと気がついた事実があるからだ。

車中で活字に目をおしている人の占める比率を、乗車するたびに計算してみると、ほとんどいつも東京の方が、値が大きいのである。雑誌や本を比較的良好に読んでいる。

大阪は、多くが新聞、それもスポーツ紙やタブロイド夕刊紙が多い。重い単行本となると、かなり稀なのだ。時間帯や、場所を移してもおおよそ、東京は大阪の一・五倍は「活字人口」が多い動定となる。

むろん、ケータイメールの普及で事情は若干変わってきたのも事実。以前よりも、活字人間の絶対数が減少した。けれど、メールをしている乗客自体の数も、やはり東京は大阪を大きく上回る。さらに数百人規模で、日本語の語彙数や読める漢字の数を両地域で個人ごとに測ってみるとなんと、やはり東京の方がはじき出される数値が大きいことが明らかとなったのだ！

これを、どう解釈すべきかと頭を悩ませている。まず大阪に好意的な解釈。――関西はもともと話し聞く文化なのに対し、関東は読み書く文化。その違いが出ていくというもの。蛇足であるが、わたし自身は大阪の住吉という下町の育ちである。

次は個人的には悲しいけれども別の解釈。――日本は一極集中がたいへん進んでしまった。とりわけ関西の地盤沈下には、目に余るものがある。そして、それは経済ばかりか、文化面にもおおよぶに至った。あげくのはてに、知的格差が顕著化したと見る考えが成り立つ。どちらが妥当なのだろうか？

とりあえず東京と大阪以外の街でも、同じ観察をすることが必要かもしれない。因みにわたしの暮らす名古屋近郊は、東京タイプに属する。では、福岡や札幌などではどうなのかと思うものの、まだ検証するチャンスがないままでいる。

誰か協力してくれる人は、いないものだろうか。文化人類学や民族学といっても、遠いところへ出なければいいというものではないだろう。もっと足もとを見つめ直しませんか。

月刊



目次

FEBRUARY 2007  
月刊みんぱく 2

01 エッセイ 世界へ世界から  
大阪と東京の考現学  
正高 信男

02 特集 災害

現代の地球環境と自然災害  
石 弘之

災害をとおした本来の民俗学とは  
森栗 茂一

災害とエスノグラフィー調査  
林 頼男

被災者と角突き牛との絆

菅 豊

助けを求められない「グーヤル」

子島 進

援助の功罪

杉本 良男

08 未来へひらくミュージアム

美術作家が見た美術館

白川 昌生

11 表紙モノ語り

カラジャ人形

中牧 弘允

12 みんぱくインフォメーション

14 万国津々浦々

変わらぬ村、変わる人びと

熊谷 圭知

15 人生は決まり文句で  
コーラの実をもたらず者は、  
人生をもたらず  
松本 尚之

16 外国人として生きる  
日本に夢を託すマリ人  
後藤 由佳

18 地球を集める  
レプリカで表現する  
印東 道子

20 生きもの博物誌  
バナナの食べ方  
小松 かおり

22 フィールドで考える  
「縁」のある建築  
岩城 考信

24 開館三十周年記念事業 みんぱく公開講演会  
「日本で暮らす一移民の知恵と活力」  
次号予告・編集後記